

# 芸術と教育 V

## — 鑑賞教育のすすめとギャラリーの活用 —

筒井 通子

奈良学園大学奈良文化女子短期大学部

### Art and Education V :Recommendation of Art Appreciation Education and the Use of Galleries

Michiko Tsutsui

*Naragakuen University Narabunka Women's College*

幼児教育にとっては、幼児教育を学び、子どもを育てる教育にかかわろうとする者が、人格形成の基礎となる美術教育に関心・意欲をもち、豊かな感性や表現する力をもった子どもを育成できるようになることが重要である。美術教育としての鑑賞教育は、様々な教育手段や方法がある。そこで、教育にかかわろうとする者が「美」を鑑賞できる術を考案するとともに、鑑賞活動から豊かな創造力を育む方策を提示する。

キーワード：芸術と教育、ギャラリーの活用、ギャラリートーク、人格形成、創造力、表現力、鑑賞教育

## 1. はじめに

幼稚園教育要領の第2章の「内容の取り扱い」の「表現」の中に、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」とあり、そのねらいの一つとして「いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。」がある。その内容では、「生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。」「生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。」とある<sup>1)</sup>。また、小学校の学習指導要領では、学校で子どもたちの「生きる力」をよりいっそう育むことを目指している。新たに規定された目標には、「創造力」があり、学力の重要な3つの要素の中には「表現する力」を育むことが書かれている。

筆者は、独立行政法人国立美術館が行っている「美術館を活用した鑑賞教育についての指導者研修」の一期生である。この研修は本年度で10年目となる。その後、平成20(2008)年、国際美術教育学会(InSEA 世界大会 in 大阪2008)で筆者は「小学校教育の中での美術教育の重要性」を述べた。そして、この10

年間、「鑑賞教育」の重要性と「芸術と教育」の関連性を「芸術と教育Ⅰ～Ⅳ」として検証するとともに、保育者になろうとする者への「鑑賞教育」を行っている。

「鑑賞教育」の充実に関する研究は、2005年から現在に至っている。それは、人格形成の一翼を美術教育が担っていると考えるからである。図1は、書道、絵画、造形表現「新聞紙で制作した犬」を活用して教育する一例である。

鑑賞能力、コミュニケーション能力があり、造形表現の構成や効果について論理的に分析鑑賞ができる保育者になるための方策として、ギャラリーやアトリウム、造形教室を活用した方策を提案する。また、「芸術」と「教育」の関連した実践例を挙げる。



図1 「芸術と教育」

## 2. 「鑑賞教育」の意義

### 2.1 「美術鑑賞教育」

美術鑑賞は、成長期の子どもにとって芸術文化に触れ、豊かな感性を育むことができる。

美術鑑賞をめぐる環境は、「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」の第1回から今日に至るまで大きくかわってきた。今日では、「ギャラリートーク」という言葉も多く使われるようになってきた。ただし、「美術鑑賞」と「美術鑑賞教育」は違う。「美術鑑賞教育」は、意義や目標がなければならぬ。そして、教養を深める。筆者は、「美術鑑賞教育」によって創造力が高まると確信している。

「美術作品」は文化である。「美術作品」を通じて文化が、語られるのである。長い時代を経て今も何が語られているのか…、創造力を高められる作品は無数にあると言ってもよい。それらを鑑賞することにより、創造的な理解力が付き、知識へとつながる。美術、芸術作品に触れることによって子どもたちは、その作品からのメッセージを受け取り、それが子どもたちにとって教養となっていく。

本論では、鑑賞の多様な方法の一つとして身近な絵画作品と学生作品の鑑賞をする。鑑賞の場所をギャラリーと大学アトリウム・造形室とし、身近な人物の制作したものを鑑賞することで、親近感をもちながら、感動、共鳴、共感をし、表現への意欲と創造力の豊かさへとつなげる。

### 2.2 芸術と教育との関連

筆者は、算数数学教育、家庭教育、生涯学習に関係する仕事をしてきた。その中で、学校教育は、生涯学習の一つの過程であり、芸術はそれらの根底にあると考える。

芸術を通して、学習者自身が自分で「作品解釈」をしていき、思考力、創造力、やがては、問題解決能力へと進み、概念を構成していく。

「芸術と教育Ⅰ」で、芸術を通して「豊かな人間性の育成」と「人権教育の推進」をする方策の一つとしての「美術館の活用」をあげた。美術館の本来の機能を生かしながら、「観て読んで触って感性を豊かにするコーナー」(図2)と自他の生命と人権の尊重をアレルギーの飼い犬の絵画「じろこ」(図3)を展示したコーナーで提案した。心を込めて表現した絵には、人の心をゆるがす大きな力があつた。

今回は、ギャラリーとアトリウムで美術鑑賞をして教育と関連付ける。以下に実践の一例を示す。



図2 鑑賞者が自由に観られるコーナーの設置



図3 障がいのある犬「じろこ」の絵

### 3. ギャラリーの活用

#### 3.1 ギャラリー夢&トーク

ギャラリートークは美術館を中心に多様な方法で行われている。美術館を単に施設として利用するのではなく、鑑賞者が能動的に行動できることにその意義がある。

筆者は、より、自由に手軽に鑑賞教育が行えるように、「ギャラリー夢&トーク」と名付けたギャラリーと「芸術と教育」を研究するための施設「奈良芸術と教育研究所」(HP: <http://sky.geocities.jp/yumetokibousky2/>)を設立した(図4)。

鑑賞教育を進めるために小さな施設ではあるが、自由に鑑賞ができ、「ギャラリートーク」を日常会話のように行えるように造られている。

尚、京都国立近代美術館と奈良県立美術館とは、ポスター掲示や催事のパンフレットを置くこと等で情報の連携をしている。



図4 「ギャラリー夢&トーク」写真左  
「奈良芸術と教育研究所」写真右

### 3.2 内容与方法

筆者による絵画作品や学生の作品の鑑賞し、ギャラリートークや批評を行った。また、自身の解釈や感想を書くことも取り入れた。

#### 3.2.1 絵画作品の鑑賞

身近な絵画作品に関しては、対話式鑑賞を取り入れた(図5)。絵画を観て気付いたこと、知ったこと、疑問に思ったこと、理解したことを鑑賞者が、制作者やなかまの援助を得ながら共感したり、疑問を投げかけ合ったりするのである。それらが、自分の理解力の発展につながる(図6)。与えられた知識だけでなく、鑑賞者自らが自分の解釈をなかまに語る(図7)。語るには主体的な作品の鑑賞が必要となり、そのような積み重ねによって創造力が豊かになっていく。



図5 絵画作品の解釈を語る鑑賞者



図6 制作者と鑑賞者の交流



図7 自己の主観的解釈や客観的解釈の交流

絵画作品（図8）での学生のトーク

- A：生命力を感じるね。
- B：寒色ばかり使っているのにあったかさを感じるのが不思議やねえ。
- C：Bさんの意見、そういう風を感じることにすごさを感じるわ。わたしは、何とも言えない魅力を感じ引き込まれる。
- D：泡に声を感じる。いろいろな声が交差していて泡と泡が話しているみたい。
- E：大きい口が見えるわ。（皆の笑い）
- B：すごく、描きたくなってきた。何か、ちょっとわかった気がする。



図8 絵画作品「語らい」と制作者

学生のトークから制作者の表現に至る心情を味わったり、形や色に着目したり、日常生活から視点をかえて感じることができている。また、「自分も描いてみたい。」という制作意欲につながっている。

### 3.2.2 学生の作品展による鑑賞

ギャラリーの活用の一つとして、描くことに興味をもち、作品を描き続けている学生の作品を展示し、学生を始め(図9)、学校関係(図10)、地域の人々(図11)に鑑賞していただく。また、学生は制作者とギャラリートークをする。刺激が直接的であり、疑問にも即答してもらえ、自己の制作意欲の向上にもつながる。展示した学生のさらなる表現活動にもつながる(図12)。



図9 鑑賞する学生



図10 学校関係の方々による鑑賞



図11 地域の方々による鑑賞

自分の伸び代に気付けたこの個展は自分の人生においてとても大きなものになると思います。人に作品を見ていただくと感想までいただけず、恥ずかしい気持ちとくすぐったい気持ちもありましたが、見ていただけただけでもすごくありがたいことなんだと感じています。いつか胸を張って作品を自分と飾れるようになるうと思います。とりあえず"は個展までの自分を褒めてあげたい"の少しだけ。でもこれからは決して現状に満足せず"絵を描き続けていこう"と思いました。ありがとうございました。

図12 展示した学生の感想

地域の方の感想

- ・すてきな色づかいを楽しませていただきました。
- ・色鉛筆でこんな色が出るなんて、びっくりしました。
- ・不思議な色でした。夢を感じました。

3.2.3 授業内における作品鑑賞

学内のアトリウムと造形教室において、「活動の振り返り」としての鑑賞教育を行う。保育者になったときには、年齢に応じた観賞プログラムを組んで、子どもたちの思考を刺激し、観察力を育てて人格形成の基礎となる色や形を意識させていくことが重要になってくる。その時に、自分が、鑑賞する能力をもっていることが必要である。

参加者という形でなく、鑑賞者が作品に自分の意味付けをする。作品は作者が制作して終わってしまうのではなく、その作品をだれかが観て感じて何かが伝わることができれば作品の完成になる。

筆者は、造形の授業においては、物事に対するイメージ力の育成に力を入れている(図13)。「鑑賞」は、その「イメージ」に対する「意欲・関心」を高めることができる。また、より美しい作品を観る目ができる(図14)。

鑑賞後に感動や共感した作品を選び(図15)、鑑賞者がその作品に対する自らの解釈をレポートに書き込んでいくのである(図16)。



図13 鑑賞教育の授業



図14 地域の方々の鑑賞



図15 ミニレポートを書く学生

## レポートより

- ・それぞれ、個性があって観ることが楽しかった。作品でその人の性格がわかった。
- ・人それぞれ表現の仕方が違うし、作品を観てとても個性を感じた。皆の作品を観ていろいろ学べたし、感動した。
- ・いろいろな作品を観てこんなアイデアがあるんだとか、こういうのもきれいなんだとか、感じるところがたくさんあり、とても感動した。友達の作品を観てこうすればいいんだとか、このようにすればかわいい作品ができるのだとか、学ぶことがいっぱいあった。このことを生かしてよい作品づくりをしたいと思った。

いろいろな工夫を凝らしてあって、それだけの作品がどこまでよかったです。 1人1人の個性が表れていて、見て楽しかったです。 おもしろくもあって、エピソードも思いました。 自分だけでなくアイデアなども、みんなは、おもしろく見ました。 とても参考になることだらけでした。今後、自分が保育者になった時、 みんなのを参考にさせてもらって、作品を作りたいと思いました。	自分の作品や自分の班以外の人々の作品を見ることがとても勉強になりました。 自分の表現にはいい表現の仕方がたくさんあっておもしろかったです。 特に、フォトモンタージュは、個性豊かで素晴らしい作品ばかりでした。とても 手紙ばかりで、すくすく見ました。どの作品も見ると一生懸命にしている ななと見ました。たくさん作品を見て自分も作りたいなと、新しい発見 をたくさん見ました。
---	---

色々な作品があって、それぞれ個性もあって見ているおもしろかったです。 自分の中にあるイメージが広がった。 みんなのすてきな作品を見ていると、もっとこうしておけばよかった もって来たいな、など反省点も見つかった。 箱はどれもかわいらしく、ふんわり感じがしました。 どの作品も一生懸命にのびのびと、すてきな作品でした。	他の人の作品を見ることで、自分では思いつかなかった発想があり、「おもしろ く見たいな」と思ったり参考にになりました。色々な意見があったりして、作る だけでなく、鑑賞することもすごく大切なのがありました。人によって 考え方が違うことも改めてわかり、すごく楽しかったです。今後制作機会が あれば、友達の良かったところなどを参考に、もっとよい物を作りたいなと思っ たり、上手な人はどの作品もきれいで驚きました。でも、おもしろくも違ったり 個性が良く出ていて良かったです。
--	--

図16 学生によるミニレポートの抜粋（一部）

## 4. 成果と考察

筆者は、保育者になろうとしている者への「鑑賞教育」を5年間続けてきている。「芸術と教育」について「幼児教育とどのように関わっているか。」や芸術を通じての地域への発信等、鑑賞教育の活用を目指してきた<sup>2)</sup>。

「芸術と教育V」では、「表現から鑑賞へ」「鑑賞から表現へ」と「制作活動を通じた基礎的な知識理解」から発展させた方策である。その結果、「鑑賞教育」を実施した後の表現活動の色や形に変化が見られたことと学生のレポートより、保育者になるために「鑑賞教育」が重要であるという理解にいたっている者が多くみられた。

「造形の基礎」の授業の自己評価で、「この科目で獲得を目指す力」の「習得状況の程度を明示するための指標（評価基準・判断基準）」として自己のレベルの三段階評価でレベル1（知っている）レベル2（できる）レベル3（理解している）とする中で項目別に、「基礎」はレベル1が0%、レベル2が5%、レベル3が95%、「造形表現」がレベル1が0%、レベル2が9%、レベル3が91%、「興味・関心」では、レベル1が0%、レベル2が18%、レベル3が82%という高い評価の数値が得られた。また、その後の授業では、創造力豊かな作品が見られた。

学生のレポートから、制作した作品に満足感をもつことも大切であるが、鑑賞して他者の作品から制

作の技法だけでなく、心情や表現にまで「気付き」がある。また、観ることが、「知識理解」につながり、共鳴共感となっている。そして、それらが保育者になったときの配慮すべきことや指導の意欲へと発展している。また、子どもの作品を部屋に掲示することの意義にもつながっていく。

## 5. まとめ

「芸術と教育」を関連させて教育することの意義について、長年にわたって研究を続ける中で、自ら表現するだけでなく、筆者は「みる」ことも表現にとって重要性であると述べてきた。その方策として美術館との連携や授業内での鑑賞教育を行ってきたが、今回は、ギャラリーでの鑑賞を試行した。その結果、ギャラリートークにもなり、「みる」から制作意欲につながり、「つくる」になる。一方的な「みる」から「みてから参考にしてつくる。」「つくってからみて参考にする。」という補完から相互補完になるのである。感覚的、感性的にものを観て、自分なりの解釈を付け加えることで独創的な創造力へとつながっていく。「美」に対する直感力が養われ、批評をすると同時に事後の制作に活かされる。芸術との出会いがあって感動が大きければ大きいほど変容がみられる。作品を鑑賞した学生全員が「鑑賞教育」のよさを感じた。

このことから、保育者になったとき、感性豊かな幼児期に、みることそのものを楽しむような雰囲気や遊びの中から美的な楽しみを味わわせようとする知識をもつ。

芸術や文化は心を豊かにし、「美」を感じ「美」を創造する人格は、「平和」を愛する。また、色や形についてギャラリートークをすることによって、他者とコミュニケーションもできる。それは、生活の豊かさにもつながる。「美」を創造し、「美」を慈しむからだ。それらが「生きる力」につながる。

「鑑賞教育」は、日々進化している。しかし、何よりも重要なことは、指導者が、目的をもって「鑑賞する機会」を与えるとともにそれを継続することである。そのためには、自分自身が鑑賞能力をもつことも必要である。

## 6. 謝 辞

ポスターや資料による情報提供をいただいた京都国立近代美術館と奈良県立美術館に心より感謝申し上げます。



## 引用文献

- 1) 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領
- 2) 奈良学園大学 奈良文化女子短期大学部紀要「芸術と教育 I - V」: 第42-45号

## 参考文献

- 筒井通子 (2014) 「芸術と教育Ⅳ」 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要 第45号: 149-156
- 筒井通子 (2012) 「芸術と教育Ⅱ」 奈良文化女子短期大学部紀要 第43号: 87-95
- 筒井通子 (2011) 「芸術と教育」 奈良文化女子短期大学部紀要 第42号: 67-78
- 筒井通子 (2008) 国際美術教育学会誌2008 「小学校教育の中での美術教育の重要性について」 7pp  
インターネット <http://www.insea.org/>
- 筒井通子 (2008) 教育美術 P44. 財団法人教育美術振興会
- 文部科学省 (2008) 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導
- 厚生労働省 (2008) 保育所指針解説書

